



登場人物

星

鶏

きつね

◆ 仲の良い星と鶏。  
◆ ナレーター、鶏

星は、毎夜さびしい大空に輝いていました。そして下界を照らしていましたけれど、だれも星を見てなぐさめてくれるものとなかったのです。星は、それを頼りないことに思っていました。

鶏が、朝早く起きて、そのりこうそうな黒い瞳の中に、星影を映して、勇んで鳴いてくれなかったならば、星は、毎夜毎夜、音もない野原や、黒い村や、白く霧のかかった林や、ものすごい水の上を照らしていることが、もう飽き飽きして、まったくいやになっってしまったにちがいありません。

けれど、若々しい鶏の喜ばしそうな鳴き声を聞くと、星は、すべての長い夜の間の物憂かったことなどを忘れてしまいます。そうして、つい鶏の愛想のいいのに引き込まれて、いっしょに日の上らない朝の間を楽しく送るのでありました。

そのうちに太陽が東の空を上ると、もはや鶏に別れを告げなければなりません。星はさも名残惜しそうにして、西の空に没してゆくのでありました。すると鶏も、もう鳴くのをやめてしまいます。

こんなふうにして、星と鶏とはたいそう仲がよかったです。星の黙って、ぴかぴかとしてお話をするのを、鶏は頭を傾けて聞いていました。そして鶏だけには、星のものをいうことがよくわかりました。また、鶏の鳴いていろいろなことを話すのも、星にはよくわかりました。

鶏 「まだ牛も馬も眠っています。私だけが起きたのです。」

と、鶏 は、大きな声を出して叫びます。またつぎに、

鶏 「いま、ようやく家の人たちは起きました。そして、  
勝手もとでガタガタ音をさせています。いま、ろうそくに  
火を点けて、裏口の方へ出てゆきます。きっと馬に  
まぐさをやるのでしよう。」

と、鶏 は告げました。

◆冬。鶏が小舎に入れられ、星と話ができなくなる。  
◆ナレーター、星、鶏

かくして、毎朝、星は夜の間に見た不思議なことを鶏に知らせ、また鶏は、村の中のできごとを星に知らせ、たがいに春から秋になるまで、長い間、仲のいい友だちであったのです。

星がしめやかな言葉つきで、

星 「いま、寒い風が、あちらの遠い森の中で騒いでいる。」

と、鶏に告げますと、鶏は、うなだれて体じゅうを円くしてちぢむのでした。

星 「しかし、鶏さん、私はおまえさんを毎晩守って

あげますよ。」

と、星はいったのです。

冬になって、雪が地の上に積もると、鶏は小舎の中に押し入れられてしまいました。そして外へ出ることを許されませんでした。

哀れな鶏は、小舎の中にいて、どんなに怠屈をしたでしょう。

ただじっとしていて、耳に聞くものは闇の中に狂う風と雪の音ばかりでありました。

鶏 「ああ、早く春になって、土を踏みたいもんだ。そして、あの優しい黄金色に輝く星の光を見たいものだ。

春、夏、秋、なんという長い間、私たちはまた星と

お話することができよう。楽しいことだ。」

と、鶏は思いました。

星はまた、毎夜限らない、しんとした雪の広野を照らしていました。ただ見るものは白い雪ばかりでした。そしてたまたま黒い森や、山や、流れが目に入りましても、なにひとつおもしろい話をするではありません。そのほか、怠けものの獣物や、いじ悪い動物はありました。自分に向かってやさしく話をする、あの鶏のような友だちはなかったのです。星は鶏のことを思い出していました。そして早く春になって、鶏が小舎から出て、空にくびを伸ばして話しかける日になるのを待っていました。

◆ある寒い夜。村を襲いに来たきつねに、星が話しかける。  
◆ナレーター、星、きつね

寒い夜のことでした。山にすんでいるきつねはもう山には餌がなかったので、里へ出てなにか探してこようと野原の上を歩いてきました。きつねは村へ行って鶏の小舎を襲おうと思っていたのです。

きつね 「おお、寒い。」

と、きつねはつぶやいて、空を向いて、太い息をしました。

星 「この寒いのに、どこへゆくのですか？」

と、星はたずねました。

きつね 「山に食べるものがなかったから、里へ行って鶏でも捕ってこようと思うのだ。」

と、きつねはめんどくさそうにいいました。

星は、びっくりしました。しかし、きつねは、なかなか年をとっていて狡猾でありましたから、星はちょっとだますことはできないと思いました。

星 「今夜あたり、狩人が寝ずに番をしているかもしれない。」  
と、星はささやきました。

きつねは、これを聞いてせせら笑いをしました。

きつね 「なんで狩人が、鶏の番などをしているものか。」  
といいました。

星 「おまえさんは、鶏小舎の在り場を知っているのですか。」  
と、星はきつねに問いました。

きつね 「なに、村の中をうろついてみればすぐわかることだ。」

と、きつねは答えました。

星は、目もとに笑いをたたえて、

星 「そんなことをして、うろついていると、狩人に

撃たれてしまいますよ。それよりここに、もうしばらく

待っておいでなさい。やがて鶏が鳴く時分です。

そうしたら、じきにその小舎を見つけることができます。

辛棒が肝心です。」

と、星は諭すようにいいました。

きつね 「そうしようか。」

と、ものぐさなきつねは村の方を見て、そうすることにしました。

そしてじっと耳を澄ましていました。その夜は雪こそ降らなかったが、

いつにない寒い夜でありました。きつねはもう、なんとも

我慢をすることができなくなりました。

きつね 「早く、鶏め鳴かないかなあ。」

とおもっていますうちに、間近の黒い森の方で、犬のなく声が

聞こえました。きつねは、びっくりしました。

星 「そら、きつねさん、私のいわないことはありません。

狩人の犬ですよ。」

と、星はいいました。

きつねは、あわてて起とうとしましたが、尾が雪の上に凍えついて

しまって、どうしても取れませんでした。やっこの思いで、痛いめを

して引き離すと、きつねは空しく山の中へ駆け込んでゆきました。

〈完〉

## Podcast のラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから  
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ  
[radio@gekidannono.com](mailto:radio@gekidannono.com)

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

## 劇団ののと読む名作文学 小川未明 『ものぐさなきつね』 Podcast 版

発行日 令和 3 年 1 月 17 日

著 者 小川未明

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/  
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。

ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底 本 『定本小川未明童話全集 3』講談社

初 出 1922 (大正 11) 年

図書カード URL

<https://www.aozora.gr.jp/cards/001475/card51084.html>

